

懐かしの 名作恐怖映画大解剖

【追悼】
名作紹介!

ザンビの父=ジョージ・A・ロメロ

'70s-'80s

(映画監督)

リドリー・スコット

SPECIAL
INTERVIEW

清水崇

(映画監督)

河野一二三

(ゲームクリエイター)

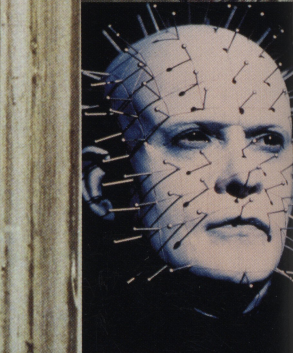
大槻ケンヂ

(ミュージシャン)

エクソシスト／赤い影
悪魔の赤ちゃん／悪魔のいけにえ
ジョーズ／オーメン／キャリー
サスベリア／ハロウィン／エイリアン
ゾンビ／悪魔の棲む家
シャイニング／13日の金曜日
チェンジリング／死霊のはらわた
食人族／遊星から物体X
ホルターガイスト／エルム街の悪夢
バタリアン／霊幻道士
死霊のえじき／悪魔の毒々モンスター
ヒッチャー／ザ・フライ
ヘル・レイザー／プレテター
チャイルド・プレイ／ペット・セメタリー
ミザリー／羊たちの沈黙 & MORE!!!

女だけのホラー映画座談会!

にっぽんの恐怖映画の歴史
愛すべきB級&カルトホラー映画

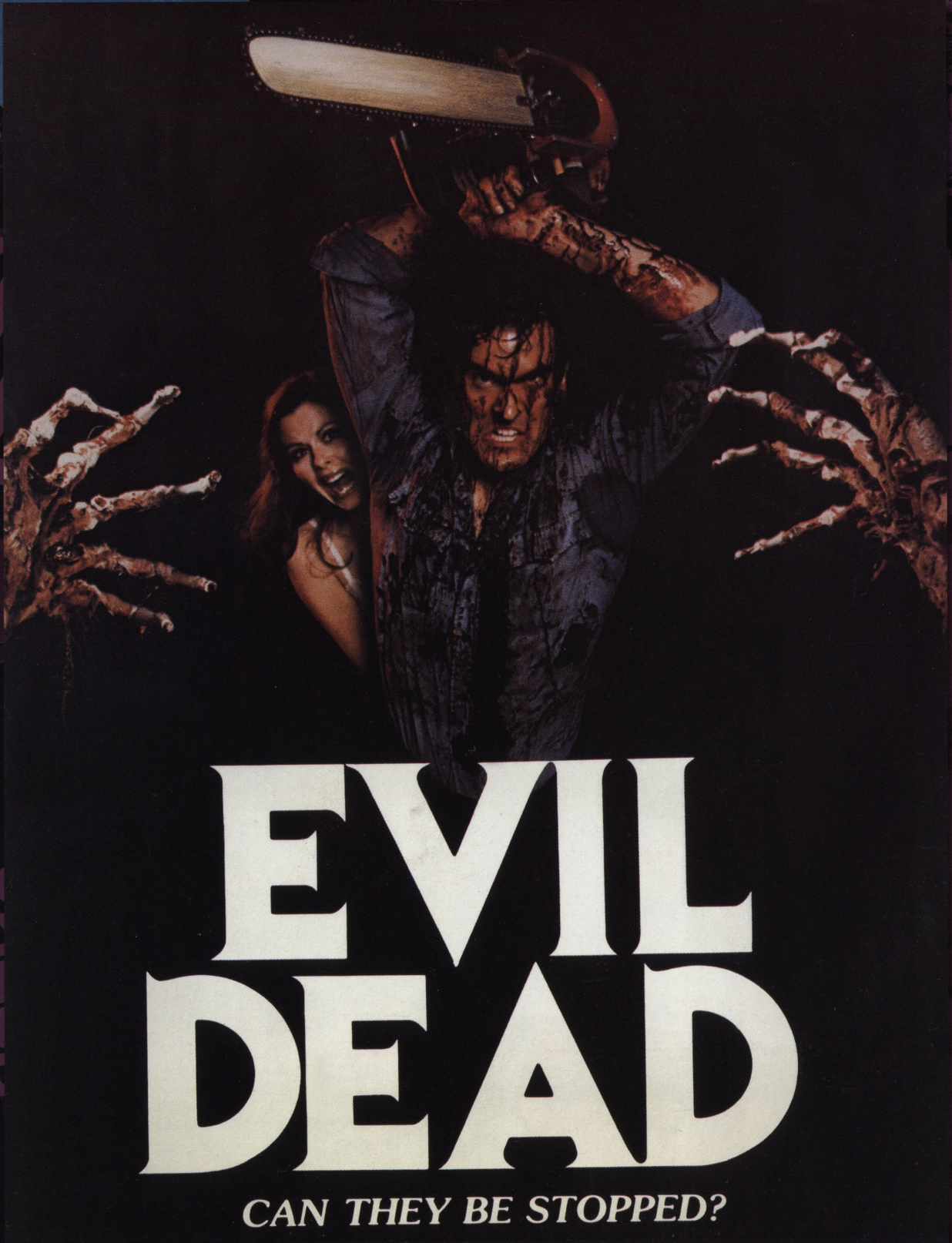


1981

POSTER GALLERY

THE TEXAS CHAIN SAW MASSACRE

THE EVIL DEAD



『死霊のはらわた』1981年日本公開

H O R R I B L E B U T

I M P R E S S I V E S C E N E S

恐怖の名場面

恐怖を感じる場面は人それぞれだ。
血しぶきを上げる殺人シーン、背後から忍び寄る怪しい影など、
皆、強い印象を残した映像を断片的にかつ象徴的に捉えているものだ。
本書を読み進める前にまずは、あの名作たちの恐怖映像を脳内再生してほしい。

『死霊のはらわた』（1981年）より。
死者の書を朗読したことにより、木の
枝に犯され悪霊に取り憑かれたシェリ
ル。監禁された地下室から

死霊のはらわた S E R I E S

一作目と同じサム・ライミ監督で作られた続編『死霊のはらわたII』（87年公開）、『キャプテン・スーパーマーケット』（93年公開）。2013年にはリブート版の『死霊のはらわた』が公開された。



『死霊のはらわたII』



『キャプテン・スーパーマーケット』



あらすじ

休暇を楽しもうとある山小屋にやってきたアッシュら5人の男女は、地下室で人間の皮でできた不気味な本とテープレコーダーを見つけた。録音されていたのは死霊を復活させる呪文だった。呪文によって仲間たちは次々に怪物へと変貌。しかも、倒しても倒してもよみがえる不死の怪物だ。襲いかかってくる彼らにアッシュは果敢に挑むが……。

80年代カルト・ムービーの代表とされる
スプラッター・ホラー

喚される死霊など、サム・ライミの脚本がホラーファンの心を絶妙に刺激。ひと安心したのもつかの間、不意に襲い来る新たな恐怖。止めどなく続く血まみれシーンにお腹いっぱいとなるのは必至だ。

実質的リメイク作としてバージョン・アップした『死霊のはらわたII』、中世ヘタタイムスリップした主人公アッシュが抱腹絶倒の戦いを繰り広げる『キャプテン・スーパーマーケット』と、以後映画では三部作となり、いずれもサム・ライミが脚本、監督を担当。さらに、テレビ・シリーズとして『死霊のはらわたリターンズ』が放映されるなど、邪悪な死霊たちの跋扈する世界は拡大を続けている。全作品に出演、アッシュ役ブルース・キャンベルはファンの間で絶大な支持を得ており、2013年製作のリメイク版『死霊のはらわた』では、製作にも名を連ねるなど、ライフワークとして大半の人生を死霊との戦いに捧げている。

異形のメイクで知られるフィンランドのハードロックバンド、ローディによる楽曲『Blood Red Sandman』のミュージッククリップは『死霊のはら

わた』を下敷きとした不気味な内容。ホラー映画としてジャンルは微妙に異なるが、ロブ・シュミット監督『クワイモリ』、イーライ・ロス監督『キャビン・フィーバー』も、山小屋を舞台に惨劇が巻き起こる。なかには、山小屋そのものがタイトルとなったドリユー・ゴダード監督『キャビン』まで登場、『死霊のはらわた』を彷彿とさせる導入部から、さまざまな要素を幕の内弁当のように詰め込んだ異種格闘ホラーへと発展していた。（丸目蔵人）

地下に閉じ込められた
シェリルがゾンビにな
って復活!

THE EVIL DEAD

死霊のはらわた

SPLATTER
スプラッター

米、日本公開：1981年

監督：サム・ライミ

出演：ブルース・キャンベル、
エレン・サンドワイズ

後にトビー・マグワイア主演の『スパイダーマン』シリーズで世界的ヒットメイカーとなったサム・ライミ監督。その才気あふれる長編デビュー作にして、1980年代カルト・ムービーの代表とされるスプラッター・ホラーである。機材、人件費など、低予算（40万ドル弱）で数々の制約を抱えながらも、森を疾走するカメラ、触手モノさながら女体ヘロティックにからみつくイバラなどアイデア満載で、ときにコミカルな要素も加えながら悪夢の物語を展開。公開同年にはオカミの主観ショット（サーモグラフィ風）を多用した予算潤沢な『ワルフェン』もあつたが、スピード感、まがまがしさなどで決して引けを取っていない。

突然醜悪な化け物へと変貌を遂げた女性が暴れ回り、それを止めようとするもさらに凶暴化。やむなくパンチを食らわせるが乱暴狼藉は収まらず、次第に正常な人間側も反撃をエスカレートさせていく。中途半端に手加減すれば、一連のゾンビ作品同様に思わぬ深手を負う。男たちの騎士道精神が麻痺していく中で、見ているこちら側の仏心も崩壊。人里離れた山小屋に足を踏み入れたリア充青年たちとともに、戻れぬマニア道、いや、魔界へと引きずり込まれるのだ。

古代シュメール語で記されたネクロノミコン（死者の書）、オープンリー